

『The Year Book of Japanese Art 英文日本美術年鑑』について

— もうひとつの「日本美術年鑑」と対外文化宣伝

五十殿利治

1927年に創刊された『Year Book of Japanese Art 英文日本美術年鑑』については、管見によれば、これまで美術史関係の論文では特定の研究対象として検証にされたことがなかった。むしろ誰によって編集されたのかということよりも、誰に向けて発行されたのかを考えれば、同年鑑が一般向けでなかったことは自明であるし、また近代日本美術史の研究者にしても、同時代に朝日新聞社からより内容の充実した『日本美術年鑑』が出ており、よほど特別な関心でもない限り、わざわざ英文版を参照する必要がなかった。要するに、発刊当初から国内読者がほとんど期待できない美術年鑑、それが『英文日本美術年鑑』であったといえる。

しかし、それが発刊されていた事実は打ち消せないし、そこに意図がなかったはずもない。以下で検討するように、対外文化宣伝という文脈で考えると、この美術年鑑には見逃せない位置づけがあり、その内容にも興味深いものがある。

番付から年鑑へ—美術の社会化と歴史意識

ところで、日本近代美術に関して美術年鑑といえ、最初に名が上げられるのは明治末1911年に岩村透の推奨もあって画報社から刊行された『日本美術年鑑』であるが^①、後年の美術年鑑と比較しても遜色が無いほど、多種多様な情報を盛り込んだ貴重な出版であった。文展が定着しつつあり、美術界にとっては必要性が高まったとはいえ、これはいかにも時期尚早であったようで、わずか三巻で廃刊となった。その理由は推測するまでもないだろう、編集に費用も嵩み、手間もかかるのに、肝心の読者がいなかったということだ。1910年開設の高村光太郎の「琅玕洞（ろうかんどう）」をはじめとする明治末・大正初年のいわゆる「初期画廊」がいずれも短命であったことと無縁ではない。年鑑発刊の準備作業の労苦について、画報社の坂井犀水はこう告白している。

「(略) 編輯の費用は非常に節約したけれども、単に六千余名(最初に調べ出した総数)の美術家并に美術に関係ある人々へ々々照会を發した、其往復の郵税だけでも、余り小額ではなかつたのである。其他諸雜費も案外高むだ。」^②

しかもこうした努力にもかかわらず、美術家の中に警戒心を抱く人間がいた。

「(略) 中には真面目に取り合つて呉れない人すら多かつた。其一例を挙げれば、帝室技芸員某氏の如きは其略歴を確かめる為、主任者は数回往訪を重ねたことすらある。」^③

じつに「本書は実に汗の凝りだ」というのである。

別の角度からいえば、近代的な「美術年鑑」は、まだ伝統的な「番付」を超えることができなかった。瀬木慎一編『江戸・明治・大正・昭和の美術番付集成』(2000

年)を繙けば、江戸に始まりじつに昭和までその伝統が脈々と受け継がれたことがわかる。瀬木によれば、美術家の人気を示すという点で欧米のオークションレコードなどとは異なるユニークな存在である「美術番付」が退潮するのは、昭和期に入ってからのものであり、「急速に、冊子や書籍形式のいわゆる年鑑類へと移行する」とされる^④。

そうした番付から年鑑へという例として、『現代画家番付』(1917年創刊)を衣替えしたという『現代美術家名鑑』(1933年)(図1)をみてみよう。「緒言」には「一大刷新」を加える編集方針について、つぎのようにある。まず、日本画部を第一編(第一部)とし、洋画彫塑工芸を総合して第二編(第二部)とする。そして、具体的には「索引の至便を主なる目的として」、つぎのように編成したという。すなわち、「前者「第一編」は雅号の頭字、後者「第二編」は姓の頭字の以呂波別となし、各其の待遇、閱歴、師伝、系統、成績等を輯録し」て、さらに「鑑賞家の参考資料として、日本画及洋画の各団体別幹部一覽表、帝室技芸員及官展審査員表、鑑定家一覽表、改姓改号訓等をも追録して巻末に編入せり」とされている^⑤。

一方、『現代画家番付』では、まさに番付らしく、日本画家欄のみであるが上下二段組で、上が関東、下が関西となつて、作家名が並ぶ。たとえば、「昭和五年改正」版では(図2)、横山大観と竹内栖鳳、がそれぞれの最高位となっている^⑥。番付の上位者は活字が大きく、下位になればなるほど小さく、学歴、入選歴等の付帯する情報も少なくなる、あるいは無記載となる。なお、明治期の番付を『三彩』誌上で紹介した青木茂は「性別や年令ではなくて、グループや団体が番付に載るようになった初めてのものかも知れ」ないとして、『東京専門書画大家一覽表』(1899年6月)について指摘しており^⑦、番付それ自体の形式が美術活動の変容に対応して変遷する具体例といえよう。

このように、内容としてみれば、改訂された『現代美術家名鑑』にしても、画報社の美術年鑑とは大きく性格を異にしており、あくまで個人を単位とした作家名の一覽に若干の付帯情報が添えられた程度といえよう。くわえて、名称こそ「年鑑」に近づいたが、実際には日本画家を対象とした「現代画家番付」、そして洋画家を対象とした「現代洋画家番付」(同じ面に「現代彫塑家番付」と「現代工芸家番付」掲載)が表裏一枚の付録とされている事実は見逃せないのである。

『現代画家番付』と同時期の試みとして、1918年『中央美術』誌を発行していた日本美術学院が光用穆編により刊行した四六判の『現代美術界総覽』がある。本書は三版を重ねただけであるようだが、番付よりは年鑑に近い性格がうかがえる。内容はまず主要な団体展(文展、院展、二科展)について創立沿革、審査員、構成員等に

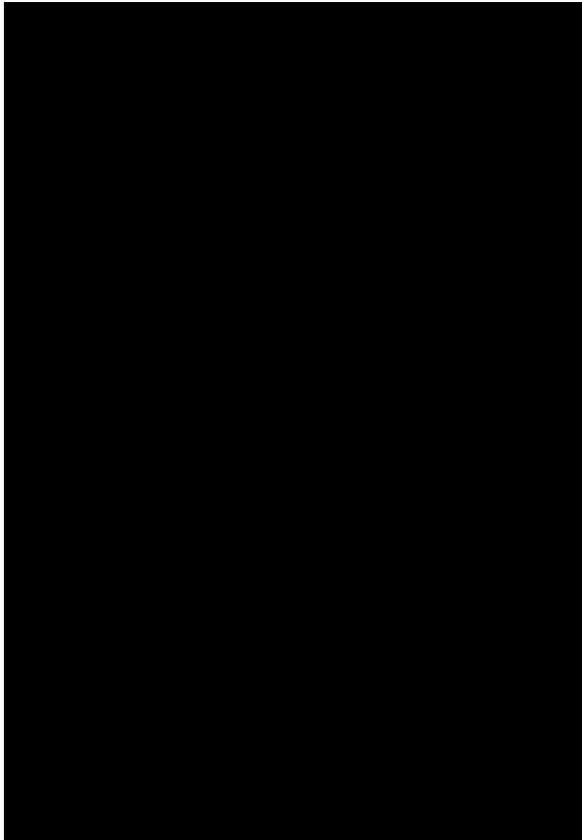


図1 清水不濁編『現代美術家名鑑』1933年

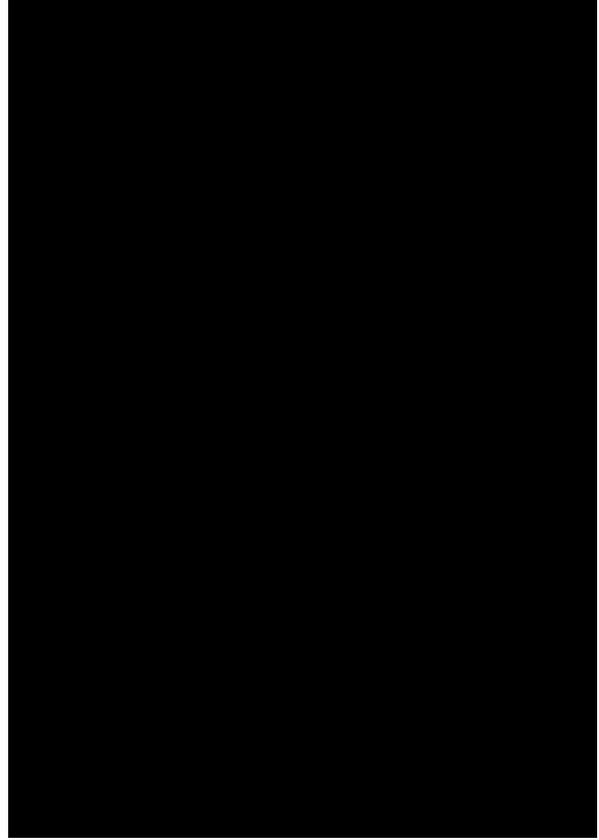


図2 『昭和五年改正 現代画家番付』

ついて述べる。文展についてはかなりの紙幅を割いており、受賞成績一覧は20頁ほどになる。ついで、その他の団体についても簡単に紹介し、160頁ほどのいろは順の「現代美術家録」、そして付録として「明治以後物故せる美術家」が盛り込まれた。

このように『現代美術界総覧』は個人中心の番付よりも、団体展中心の年鑑に近い。ただし、採録された情報は限定されていることはいなめない。「緒言」で編集者自身が「最初の大計画から見れば其の片影をさへも実現し得ない」と告白するのも無理はない⁹⁾。

それでは、年鑑は昭和初年に東京朝日新聞が再開するまではどの書肆も手をつけなかったのであろうか。管見の限りでは、若干の試みがあったが、地歩を固められないままに短命に終わったということが出来る。その試みとは第一に美術年鑑編纂所編『美術年鑑』(1925年1月)、つぎに石井柏亭編『日本美術年鑑』(1925年12月)、そして税所篤二編『アトリエ美術年鑑』(1926年)である(図3、4、5)。いずれも奇しくも創刊号のみで頓挫することになったのであるが、そこには通俗的な「番付」を超えようという意識が当然のことながら働いていた。

『文芸年鑑』を出していた二松堂書店発行による『美術年鑑』の「序言」で芳川越は、『美術年鑑』は美術界に於ける文化的出版計画であつて、市井に存在する、美術番

付編輯と同一視して貰ふ事は、発行者及編集者にとっては、甚だ迷惑な事である」と出版の「文化的」な意義を揚言しつつ、「番付」の通俗性に廃する旨を述べている¹⁰⁾。

このように大正から昭和へと転じるなかで、短命とはいえ、つぎつぎと美術年鑑が企画されていたのである。先例の挫折を知りながらも、なお新しく挑戦するということ、このことは美術界の変化を前提としなければ説明がつかないであろう。

税所は「序」の冒頭でその変化について述べている。

「最近十年間の日本美術界の進展は年と共に複雑になつて来た。僅か一ヶ月の美術界の事件進展を控へて置くだけでも繁事となつた。殊に同じ一ヶ月でも最近の一ヶ月は益々多事となるばかりで、どうしても完全、豊富な記事を以て録した年鑑が必要となつて来た。」¹¹⁾

つまり、美術界というマーケットが拡大したこと、しかもそれがひとつの等質な情報を共有できるような形で生じていることである。たとえば、帝展なら帝展という基盤的な存在があり、その審査員を務めたことや入選したことがひとつの価値のある情報として共有される社会的な枠組みが形成された(あるいは、形成されつつある)という認識が、新たに年鑑を編むという企画の前提となっていたはずである。

いまひとつ見逃せないのは、歴史意識である。同時代

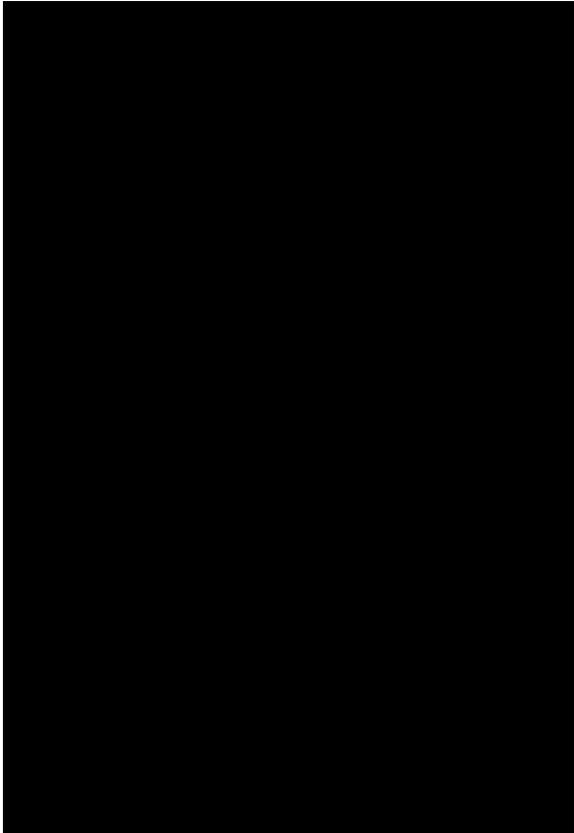


図3 美術年鑑編纂所編『美術年鑑 1925』

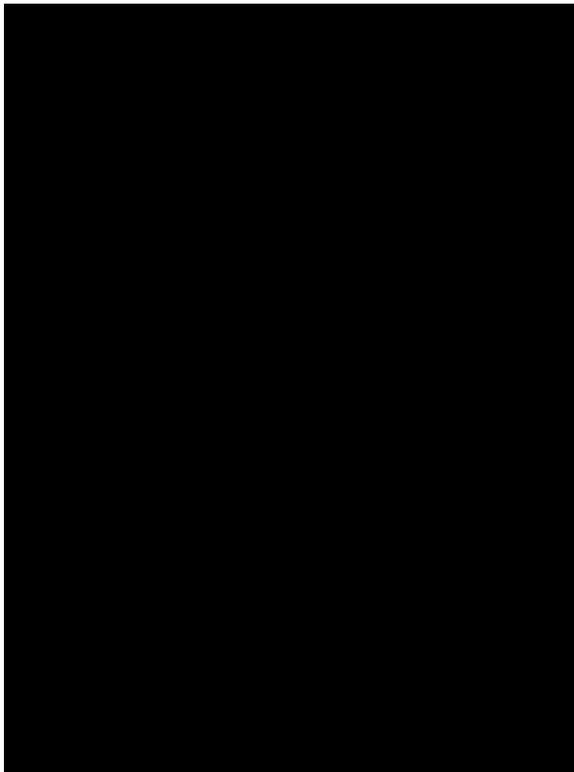


図4 石井柏亭編『日本美術年鑑』1925年

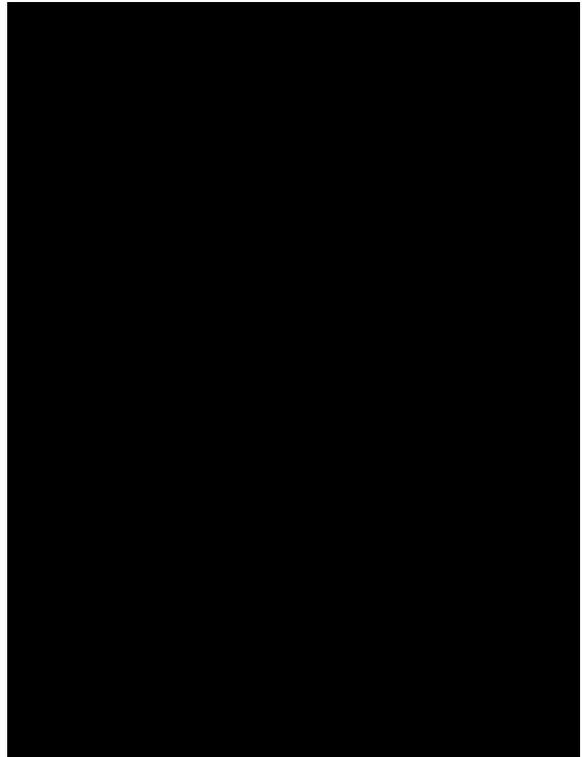


図5 税所篤二編『アトリエ美術年鑑』1926年

の美術現象についての記録でありつつ、なおかつそれが途切れのない「歴史」に接続しているという意識が生まれている。むろん番付に歴史意識がないとはいえない。事実『現代画家番付』にも「書画大家年代表」等の美術史的な表や一覧が付されてはいる。しかし、記録という視点をもって年鑑自体が編纂されていることは見逃せないのである。石井柏亭はこう主張する。

「これは実に日本の芸壇一年間の総覧であり鳥瞰図である。数種美術雑誌の保存に不便を感じる人は此一冊を以て概それが代りとなすことを得るであらう。将来美術史を編まうとする人々や、何事か美術に関する調査をしようとする人達にとってこれが如何に有力なドキューマンとなるであらうかは言ふ迄もない事である。」⁽¹¹⁾

1907年に文部省美術展覧会が開設されたことは美術界にとって画期的なことであったことはいまさら贅言を弄するまでもないが、毎回出品作の図版を掲載した図録が出版されるなど、記録化が進む。回数を重ねるにしたがって、その社会的な位置づけが一層固まり、社会の中に浸透するのである。

だが、なるほど明治末とは異なる美術界の状況があったが、画報社の取り組みと同じように、1920年代半ばの中小出版社による美術年鑑は再び挫折した。朝日新聞社のような大手によってその継続的な出版が初めて可能となったのである。

では、英文版日本美術年鑑はどうであったのか。

二つの美術年鑑

『英文日本美術年鑑』は創刊当初はたしかに一部の注目を集めた。『美之図』1928年1月号において、「覆面居士」が新設の「ブックレビュー」欄で「真の良書」として『日本美術年鑑』とともに「二つの美術年鑑」と題した記事で紹介している。居士はまず両年鑑の創刊を歓迎する。

「美術界にとって最も有意義な足跡を遺した[。]本年の最終の月私は意義ある二つの美術年鑑を手にし得た。一つは朝日新聞社編纂の昭和四年版日本美術年鑑、一つは国際連盟協学会芸協力委員会編纂の英文美術年鑑である。前者は既に定評のある本邦唯一の美術年鑑又後者は対外的に本邦美術を正当に紹介すべき新抱負を以て生まれたもの、両者は甚だ興味ある美術年鑑上の対立をなして居るが、それは兎に角斯うした立派な美術年鑑が、一方は多大な経営上の困難を突破して本年光輝ある第三[ママ]年版を発行し、一方が新鋭の意気を以て其の遠大な抱負実現の為に之又多大な犠牲を惜しまず第一年版を発刊したのは美術界にとって甚だ慶賀すべき活躍であると満腔の敬意と同情を表せざるを得ない所である。」⁽⁴²⁾

この記事そのものは明らかに英文日本美術年鑑創刊を契機として書かれたといえる。居士は朝日新聞社の日本美術年鑑は「定評」があるとしている。しかし、読み進めると、それでもあえて同年鑑の記事として取り上げるだけの事情があることがわかる。基本的には好意的に受け止められている内容である。

1) 価格を下げたこと。原色版を割愛することになったが、「値下げした犠牲的勇氣は真に特筆大書すべき事」と絶賛する。それはこの年鑑の編者坂崎坦の主張する「美術の普遍化」という理念にも合致している。

2) 「海外新作」欄は貴重であり、「居ながらにして海外画壇の代表作に接し得る」。

3) 本欄等の記事編集については、新聞掲載の批評を収録し、しかも批評家によるものに限定し、美術家による発言は「美術行政上の感想」のみにした点を「卓見」として高く評価しつつ、なお美術雑誌の評にも配慮を要望する。

4) 便覧については、訂正を必要とするとしても世界美術家年表、とくに現代美術家録を至便であると評価する。

5) 前年まで六ポイント活字が使用され見事な体裁であったが、経費削減のためだろうが、それが廃されて「目録など見づらい事甚だしい」と苦言を呈する⁽⁴³⁾。

これに対するに、英文版はどうであるのか。

居士はまず全体的印象として「何としても未成品の感を脱し切つては居ない」と概括するが、続けて「流石瀧精一博士、団伊能氏の監修による丈に首肯し得る点が甚だ多いのは喜ばしい」と肯定的な評価を加える。とくに明治大正名作展に関わる文章と写真が多く掲載されたの

は「頗る我意を得て居る所」という。ただし、製版印刷技術や編集の面で再考の余地があるとする。それでも、「斯うして我国の誇るべき美術が正確に海外に紹介せらるゝ事は何としても慶賀に堪えない」と喜び、国際連盟協学会と団伊能と尾崎夏彦に敬意を示すのである⁽⁴⁴⁾。

このように『英文日本美術年鑑』は幸福な船出をしたといえよう。その軌跡をまず追うことにしよう。

国際連盟協学会芸協力委員会と美術界

この組織が成立するまでにはいくつかの段階があった。そもそも日本における国際連盟協会は渋沢栄一を会長にして1920年4月に発足した。この協会の成立過程等については、池井優の論文がある⁽⁴⁵⁾。それによれば、協会の意図するところは、「国際連盟の精神の達成」であり、事業としてつぎを実施することになっていた。

- (1) 国際連盟に関する研究及び調査。
- (2) 講演会の開催及び印刷物の刊行。
- (3) 本会と目的を同じくする内外諸団体との連絡。
- (4) 国際連盟会議に代表者を派遣。
- (5) その他理事会において適当と認める事業。

この日本国際連盟協会の下に学芸協力委員会が設けられたわけであるが、その上部組織は現在のユネスコ（国際連合教育科学文化機関）のさきがけとして国際連盟のもとに発足したのである。日本国際連盟協会が出版したパンフレット『学芸の国際協力』（1927年）によりその概略をみよう。

まず国際連盟第1回総会（1920年）に際して、ベルギー代表、ルーマニア代表、イタリア代表が「連名を以て学芸協力機関設置に関する一の動議を提出」した。ついで、翌年の第2回総会において連盟の創設に尽力したフランスの政治家レオン・ブルジョワ（1920年ノーベル平和賞）が提案を行い、男女12名の学芸協力国際委員会 ICIC（International Committee on Intellectual Cooperation）が発足することになった。1922年8月1日にジュネーヴで最初の会合が開催され、哲学者ベルクソンが議長となった。そして委員会には四つの小委員会、「大学連合」、「図書目録」、「文学芸術」、「知能権」が設けられた。

国内委員会の方は、1926年4月30日に組織された⁽⁴⁶⁾。委員の構成は以下のとおりである。

委員長	山田 三良	帝国学士院会員、東京帝国大学教授、法学博士
委員	姉崎 正治	帝国学士院会員、東京帝国大学教授、文学博士
	栗屋 謙	文部省専門学務局長
	小村 欣一	外務省情報部次長、侯爵
	宮嶋幹之助	北里研究所理事、衆議院議員、医学博士
	田中館愛橘	帝国学士院会員、東京帝国大学

教授、貴族院議員
 幹事 菊沢 季麿 文部省専門学務局学術課長
 栗山 茂 外務省条約局第三課長
 奥山 清治 国際連盟協会主事
 書記 寺崎 太郎 外務省事務官
 佐藤 醇造 国際連盟協会書記⁽¹⁷⁾

委員会は四部に分かれており、大学連絡兼知能権保護部（主任山田三良）、学術研究部（主任宮嶋幹之助）、文学美術部（主任姉崎正治）、演劇音楽部（主任小村欣一）があった。

具体的な事業としては四つが挙げられている。

- 一 我国学界の情報
- 二 欧文資料並に美術図録の寄贈
- 三 解題書目の作成
- 四 現行法制の英訳

一については、日本の大学の状況を報告し、最近の主要な著書の情報を送付することを目指す。二については、たとえば大学等の欧文印刷物、古今の美術図録等をパリの学芸協力国際学院 International Institute of Intellectual Cooperation とジュネーヴの国際連盟図書館に寄贈した。三については、人文科学、とくに歴史と文学に関する主要図書の解題書目の作成することである。四は、「欧米人が我国の現行の法制を理解してゐない結果、通商上又は外交上往々にして迷惑なる誤解を来すこと」があるので、「山田博士主宰の下に有力なる法典英訳委員会を組織して、先づ商法及び商事関係諸法規の英訳に着手することとなつた」という⁽¹⁸⁾。

最近の事業としては、文部大臣宛に教育博物館の拡張を進言したという。「パリ国際学院より国際博物館事務局開設、民衆芸術会議開催等に関し、我国博物館の協力援助を求めて来」たからである⁽¹⁹⁾。

このパンフレットにより学芸協力国際委員会の活動がどれほど一般に普及したのかは不明である。美術界については、『中央美術』・『アトリエ』ともに1928年6月号に「国際連盟と美術上の国際協力」という記事が掲載されている（訳文に若干の相違がある）。『中央美術』編集部は「特に国際連盟事務局から本稿掲載方を希望して来た」と注記した⁽²⁰⁾。

同文では学芸協力国際委員会の執行機関としてパリの学芸協力国際協会の「美術関係部」が実施する活動について、主に三つの事業について報告している。三事業とは、博物館国際事務局（現在のICOMの前身）、銅版画展覧会、石膏塑型専門家委員会である。

博物館国際事務局は一九二六年一〇月に成立した組織であり、その事業についてはつぎのようなものが議論されたという。

- 「一、博物館の間の相互通信組織
- 二、美術品の国際的カード・インデックス製作

- 三、カタログの統一
- 四、博物館の相互間に於て写真、小冊子、刊行物を常時交換すること
- 五、大規模及び小規模なる博物館の間に相互援助を奨励すること
- 六、博物館の教育的価値の研究
- 七、美術品にして敷「数」ヶの博物館に分散して収められてゐるもの、カタログ製作
- 八、博物館建築、保護設備、内部組織等に関する問題」⁽²¹⁾

このほか、事務局では雑誌『ムゼイオン』を1927年4月に創刊し、年三回発行する。

つぎは銅版画に関する国際的な取り決めについてである。主旨は以下のようなものである。

- 「一、主要なる銅版画協会はその蒐集を完備するため試作品の交換を組織することに同意する。
- 二、各協会はその製作せる銅版画販売のため他の都市の協会に送ること。かくて銅版画の国内的並びに国際的移動、紹介を計る。
- 三、此の取極めの重要なことを知らせるため、本問題に興味を有する都市に於て一九二七年の春季に展覧会を開催すること。展覧会は各地同時に開くこと。此の展覧会は銅版画協会の存在せざる諸国に於ても開催さるべきこと。
- 四、銅版画協会相互間の取極めは塑型製作場相互間の協定モデルたることを希望する。」⁽²²⁾

三の石膏塑型専門家委員会は一九二八年に開催された。その意図するところは以下のとおりであった。

- 「1、各国に於ける主要石膏塑型作製所表の作製
- 2、前記石膏塑型作製所の作品総覧作業
- 3、石膏塑型の国際的カタログ製作
- 4、石膏塑型製作各種新方法の資料蒐集をなすこと
- 5、石膏塑型の展覧会開催」⁽²³⁾

このように学芸協力国際委員会の活動は、直接的な事業が実施されたわけでもないのに、美術界で周知のこととはいえないまでも、主要な美術雑誌でその側面が紹介されていた事実は見逃せないのである。

『The Year Book of Japanese Art 英文日本美術年鑑』の刊行

『国際連盟協会会務報告 昭和三年度版』には、『The Year Book of Japanese Art 英文日本美術年鑑』の刊行について短く触れており、若干の経過が把握できる。

「○英文日本美術年鑑

第一年版(The Year Book of Japanese Art 1927)を十一月刊行す。瀧精一博士を顧問とし昭和三年一月を以て編纂に着手せしもの。四六版、本文百六十二頁、写真百二十葉。」⁽²⁴⁾

では、この最初の『The Year Book of Japanese Art 英文日本美術年鑑』について検討してみよう。

冒頭の序 Preface は学芸協力国際委員会長の山田三良によるものだが、時間的な制約、予算的な制約のほかに、本文、図版、装幀等については不満が残るとして、出版にまつわる問題点が列記されているところが興味深い。それほど性急な仕事であったということである。

具体的には、掲載された文章は日本語で書かれて、それを英訳にしたために、出版までに時間がかかり、費用もかさんだこと。英語による出版に落ち着いたが、当初は英語にするか仏語にするか議論があったし、また出版を委員会が手がけるのか、それとも外国の出版社に任せるのかという選択もあった。熟慮の上で、英語が選ばれ、委員会の編集ということになった。さらに、出版に際しては、編集顧問 Advisory Editor に瀧精一が就任し、団伊能が編集主幹 Editor-in-Chief、尾崎夏彦が助手を務め、さらに協会書記佐藤藤造も協力しており、山田が謝辞を記して労をねぎらった⁽²⁵⁾。

次に目次を示す。

- I. Introduction
 - II. National Treasures and Buildings under Special Protection
 - III. Art Museums
 - IV. Shoso-in Repository
 - V. The Imperial Fine Arts Academy and Artists to the Imperial Household
 - VI. Imperial Fine Arts Academy Exhibitions
 - VII. Exhibitions held by the Institute of Japanese Art
 - VIII. Nikakai Art Exhibition
 - IX. Other Exhibitions
 - X. Exhibitions of Ancient Art
 - XI. Exhibitions of Famous Works of Art of the Meiji and Taisho Eras
 - XII. Western Art Exhibitions
 - XIII. Principal Buildings
 - XIV. The Principal Schools and Institutes of Fine Art in Japan
 - XV. Art Organizations
 - XVI. Auction Sales of Works of Art
 - XVII. The Study of Art in Japan
 - XVIII. Illustrated Catalogues of Exhibitions and Other Reproductions of Works of Art
 - XIX. Directory of Artists and Art Workers
- Appendix: A Survey of Japanese Painting During the Meiji and Taisho Eras by Prof. Sei-ichi Taki

これを日本文版と比較してみよう。

『日本美術年鑑』は大きく4部に分かれている。冒頭には挿図が100頁以上配される。そして「本欄」、「便覧」、

「現代美術家録」と続く。

「本欄」の構成は、美術界総覧、美術展覧会、工芸美術界、建築界、古美術、美術界消息、文籍及出版物。「便覧」は、国宝・絵巻物、美術関係諸施設、博物館美術館、学校・研究所、美術団体、世界美術家年表となっている。

英文版と日本文版の対応関係をみるならば、どうなるか。

必ずしも厳密に合致するとはいえないが、内容的におおまかにみれば、以下に示すように対応関係は明白である。

- I. Introductionと「本欄」美術界総覧
- II. National Treasures and Buildings under Special Protectionと「本欄」国宝・絵巻物（特別保護建造物指定数）
- III. Art Museumsと「本欄」博物館美術館
- IV. Shoso-in Repositoryと同前
- V. The Imperial Fine Arts Academy and Artists to the Imperial Householdと「本欄」美術関係諸施設（帝国美術院規定、帝室技芸員銓衡会）
- VI. Imperial Fine Arts Academy Exhibitionsと「本欄」美術展覧会
- VII. Exhibitions held by the Institute of Japanese Artは同前
- VIII. Nikakai Art Exhibitionと同前
- IX. Other Exhibitionsと同前
- X. Exhibitions of Ancient Artと「本欄」古美術
- XII. Western Art Exhibitionsと「本欄」美術展覧会（将来品美術展覧会）
- XIII. Principal Buildingsは「本欄」建築界
- XIV. The Principal Schools and Institutes of Fine Art in Japanと「本欄」学校・研究所
- XV. Art Organizationsと「本欄」美術団体
- XVI. Auction Sales of Works of Artと「本欄」古美術（入札界）
- XVII. The Study of Art in Japanと「本欄」文籍及出版物
- XVIII. Illustrated Catalogues of Exhibitions and Other Reproductions of Works of Artと「本欄」文籍及出版物
- XIX. Directory of Artists and Art Workersと「現代美術家録」

両者の顕著な相違として指摘すべきは、なによりも図版の扱いである。

日本文版においては、創刊当初は三色版、網目版、グラデュア版と色刷りを含めて多彩な版を用意し、それに応じて頁あたりの掲載図版数も多様であるのに対して、英文版はモノクロの網目版のみであり、概ね1頁に1作品を配している。どちらが作品紹介に重きを置いたのかという判断は難しいが、日本文版に1頁の6作品を配す

る頁もあることを念頭におけば、英文版に軍配があがる。

なお、XI. Exhibitions of Famous Works of Art of the Meiji and Taisho Eras は「本欄」美術展覧会の一部であるが、付録の瀧精一の講演草稿 Appendix: A Survey of Japanese Painting During the Meiji and Taisho Eras by Prof. Sei-ichi Taki とともに、前出の覆面居士が示唆していたように、『The Year Book of Japanese Art 英文日本美術年鑑』を刊行する狙いのひとつとしてある、現代日本美術の紹介という側面にぴたりと合致する展覧会記事であった。実際に、Introduction の冒頭もまず The Modern Art of Japan (後述) という一節から始まっているのである。

このように『The Year Book of Japanese Art 英文日本美術年鑑』の骨格が決まった。

Introduction と日本美術界紹介

『英文日本美術年鑑』の冒頭は「美術界総覧」に対応すると述べたが、必ずしも該当する年度の美術界の動向だけを概括するという内容となっていない。むしろ適当な話題を選びながら、日本の美術界の成り立ちを外国向けに紹介する方に重きが置かれている。そして、最後の巻ではかなりナショナリズムの色合いが鮮明に浮き出るのである。

その内容を概観してみる。

第一巻、1927年版は、I. The Modern Art in Japan, II. The Principal Exhibitions in 1927, III. The Questions of Applied Art, IV. General Situation Regarding Auction Sales of Works of Art と四節に分かれている⁽²⁸⁾。上述で触れたように、冒頭は明治維新後の日本美術の展開について、二つの要因、すなわちアーネスト・フェノロサや岡倉天心に代表されるような a fresh study of ancient Oriental art そしてまた洋画の摂取にみられるような the stimulus applied by the various arts which have been developed among the nations of the Occident を挙げた。そして「実験段階 the experimental stage」にある同時代の美術には、その結果としてフランス美術の模倣や東洋美術への単なる回帰としてみられるとしても、有望な兆候をみつけることができると強調している。また三節は、帝展第四部として工芸の部門が開設されたが、審査員の専門性の尊重がかえって審査の正当性への疑問を喚起したとはいえ、今後工芸部門の存続の方がはるかに重要であると警告している。

第二巻、1928年版では、I. The Enthronement and Art, II. General Survey of Art Exhibitions, III. The Appreciation of Chinese Painting in Japan が話題となっている⁽²⁹⁾。とくに冒頭では昭和天皇の即位を記念した大礼記念行事について恩賜京都博物館や東京帝室博物館での展覧会、あるいは京都市が建設に着手した美術館(大

礼記念京都美術館) のことなどについて述べる。また、諸展覧会については、展示施設が充実し、こうした古美術展観の機会が増えた結果として、「展覧会がファッションとなった Exhibitions have become the fashion」し、さらに鑑査方法の不備も手伝って、それまで帝展が独占していた地位が揺らぎ、入場者の減少に端的に反映していると指摘している。最後に、仏教伝来と関係する中国絵画の伝来以降の中国と日本との美術交流の流れを粗描して、日本における中国絵画の評価を説いている。

第三巻、1929-30年版は、I. Exhibitions and Art Education, II. The New National Treasures Law, III. The International Aspect of Fine Arts in 1929 が取り上げられている⁽²⁸⁾。冒頭では、東京美術学校の設立以来、西欧流の学校システムによる教育によって技術をもった「美術家」が世に出るようになり、帝展では出品者が激増した。そこで展覧会での成功を狙って観衆を引きつける「ポスターのような絵画 poster-like paintings」が、「線描の哲学的芸術 philosophic art of lineal representation」よりも幅を利かすことになった。しかし、これは「過渡的現象の一時的現象の特徴 a passing phenomenon characteristic of a transition period」であり、早晩、日本絵画本来の「深遠なる芸術趣味 the profound artistic taste」を探求することになろう、と結論づける。つぎの国宝に関する法律改正については、その趣旨が個人蔵の国宝の海外流出を防ぐため、また海外流出時に発生する高額な絵巻物等の裁断を阻止するためであることが強調されている。最後は、国内展の低調を指摘して、活発な国際交流を称揚している。日仏芸術社による日本美術展、藤田嗣治の個展(東京朝日新聞と三越)、大英博物館のローレンス・ビニヨン Laurence Binyon の人気を博した公開講座などが例として挙げられた。

第四巻、1930-31年版は、I. General Remarks on Exhibitions, II. The Japanese Art Exhibition at Rome, Italy, III. Designation of Private Properties as “National Treasures”, IV. The Reconstruction of the City of Tokyo and its Architecture が取り上げられている⁽²⁹⁾。冒頭では注目されるのは、近年における日本画の傾向への手厳しい指摘である。第一次世界大戦後の十年ほどの経済的好況が美術家に生活の余裕をもたらす一方で、うわべだけの絵画が跋扈することになったと慨嘆する。これと関連して床の間に飾られるために多大の需要がある日本画においては、伝統的な技法が単純に繰り返され、色彩の感覚的な効果もっぱら追求された結果、帝展の日本画部では技量はみごとであるにせよ、単調な印象を免れない。なぜなら「日本絵画の本質的特質、つまりなくてはならない感性あるいは精神的な雰囲気 the essential factor of Japanese painting, the fundamental emotion or spiritual atmosphere」がまったく欠落しているからと嘆



図6 The Year Book of Japanese Art 1931-32

く。この英文日本美術年鑑では希なことだが、プロレタリア美術まで引き合いに出して、だから、「プロレタリア美術家たち proletarian artists」から「生活のための芸術 Art for life's sake」と非難を受けている。現在の経済的な苦境はかえって日本画家の生活、そして日本画の形態の感覚性 formal sensuosity を見つめ直すことを促すことは疑いないとする。

ローマにおける日本画展については後述するが、続く国宝と個人コレクターの議論も興味深い。個人コレクターの国宝が秘蔵されて、なかなか公開されない点について、まず茶の湯の伝統から主人のもてなしとして秘蔵の宝をみせる習慣があるし、それゆえにこそ国宝となるものが大切に守られてきた、そして第二として作品の素材が堅牢ではないこと、最後に適当な展示施設がないことがその理由として挙げられる。しかし、美術作品を秘蔵する習慣は廃れつつあり、また博物館の改築も進行中で、外国からの訪問客が日本の新旧の作品に接する機会は今後増えることになると結んでいる。

最後に震災復興における建築について触れ、耐震性の高い鉄筋コンクリートの建物には、ヨーロッパ式の歴史的スタイルと新しい建築方法を結合させたモデルに倣うものと、伝統的な日本建築と新素材によるものがある。前者は鉄筋コンクリート式の建築に多少なりとも近いが、伝統的に木材による日本建築ではなかなか調和しない。しかし、今後、日本独自のスタイルや素材によって近代

的建築がなされることがないとはいえないと指摘する。

最終巻、1931-32年版では(図6)、General Remarks on the Exhibition of 1931, New National Treasures, Exhibitions of Chinese and Korean Art が取り上げられた⁶⁰⁾。巻頭は日本美術が岐路に立っており、平福百穂や望月春光らの近作を例にあげて自然探求と高度な感性によって東洋精神の深遠さを顕示することで、明治以来の伝統主義とリアリズムの対立を超克することが期待されると、これまでの巻とはかなり論調が変化して、日本画に偏った議論を展開している。最後の節にはかなりの紙幅を割いている。ここでも、日本の独自性が強調される。いわく、中国美術品は戦乱が多かった本国より日本に数多く残されている、たとえば仏教美術や宋絵画がそうである、中国や韓国の芸術を受容しているが、日本人の鑑識眼が強く作用している、たとえば茶の湯にかかわる美学(洗み)や茶器が好例である。このように日本美術は東洋美術の他の峰々をはるかに凌駕しているとしつつも、最後は東洋美術の多様性の存在を指摘して、一文を結んでいる。

主要展覧会の紹介と付録記事

『Year Book of Japanese Art 英文日本美術年鑑』は最初の巻で東京朝日新聞主催の「明治大正名作展」が特集されたように、当該の年度に開催された重要な展覧会についての項目が必ず付加されている。「明治大正名作展」については別のところで詳しく述べたことがあるので⁶¹⁾、ここでは深く立ち入らない。この展覧会に関する瀧の論説については、英文版に注記されているように⁶²⁾、1927年6月8日に朝日新聞社講堂で行われた「明治大正名作展記念美術大講演会」に際して「明治大正六十年間の日本画を顧みて現代の要求に及ぶ」と題されて講じられたものである⁶³⁾。講演後、朝日新聞紙上で公表された様子はないし、また瀧の本に収められたことについても詳らかにしないので、貴重な出版といえる。

ついで第2巻、1928年版をみてみよう。本巻で焦点が当てられたのは、まず報知新聞社主催「浮世絵展」(東京府美術館、1928年6月6日～6月25日)、「京都大礼博古美術展」(恩賜京都博物館、9月20日～12月25日)、そして外務省後援による「唐宋元明名画展」(東京帝室博物館・東京府美術館、11月24日～12月20日)の三事業である。すでに触れたように、冒頭では The Enthronement and Art ということが話題になっている。

「1928年という年は日本国民にとって記念すべき年であった。というのも天皇裕仁の即位が行われたからである。即位式そのものは11月10日に京都で挙行されたが、これに付随する行事や式典がその後数週間にわたり続けられた。」

The Year 1928 was a memorable one for the people of

Japan, for it witnessed the Enthronement of His Imperial Majesty, Emperor Hirohito. The Enthronement proper took place in Kyoto on November 10th, while the various attendant rites and functions were continued for several weeks afterwards.⁽³⁴⁾

この巻で付加された項目として見逃せないのは Japanese Artists Abroad である。これは日本における洋画の導入から説き起こして、西洋で学んだ洋画家に触れ、その後現在パリで活動している作家たちの名を挙げて、その活躍振りを紹介している。川上冬崖、高橋由一、国沢新九郎等、幕末明治の先駆者を挙げた後で、現在パリで活動する作家を列挙している。これは『日本美術年鑑』創刊時から3年間にわたり「本欄」に掲載されたエミール・コンドロワイエ Emile Condroyer (1897-1950) のフランス美術界に関する記事中に毎回登場する在パリ日本人画家の一節に対応するものである⁽³⁵⁾。とくに1928年末に発行された『日本美術年鑑』では、これまで以上に日本人作家について詳しい解説が掲載されているが、Japanese Artists Abroad はこれを参考にしている部分があるようにみえる。

なお、付録にはヨネ・ノグチ（野口米次郎）による広重論が掲載された。ノグチは詩人としてアメリカで有名となったが、日本美術についても積極的に英文で執筆していた。この『The Year Book of Japanese Art 英文日本美術年鑑』に掲載された英文書籍一覧 List of Selected Books on Japanese Art には、Noguchi の本として、Hokusai, 1925; Korin, 1922; Some Japanese Artists, 1924; Spirit of Japanese Art, 1915[sic]; Utamaro, 1925 が列挙されている⁽³⁶⁾。日本美術の海外紹介という点では大きく貢献しており、付録掲載も順当な役割であったといえる。

第3巻、1929-1930年版についてはどうか。

展覧会として注目されているのは、Exhibition of Famous Japanese Art Treasures は読売新聞主催の日本名宝展（東京府美術館、1929年3月19日～4月19日）。同展は「国宝始め諸名家の逸品をすぐり出品総数二二〇点余、古美術に関する展覧会としては近来大規模な催し」とも評された⁽³⁷⁾。関東大震災により皇室博物館が大破して、展示空間が表慶館のみであったことを想起すれば、その意味するところがよく理解できよう。

つぎに室内社画廊、青樹社、石原求龍堂の三画廊が主催した Retrospective Exhibition of Western Style Art、つまり「洋風美術回顧展」（東京府美術館、1月12日～同31日）である。『日本美術年鑑 第四年版』はほとんど重視していないのに対して、この『英文日本美術年鑑』では相当の紙幅を割いている点は注目される。まず展示内容の概略を説明し、続いて横山松三郎から大下藤次郎までの日本人美術家のみならず、重要な役割を演じた外国人ビゴ、ワーグマン、キヨツソーネ、フォンタネー

ジについて、簡単な履歴を列挙している。日本の美術界を紹介するという立場からみれば、格好の話題のひとつであるから、その扱いは肯かれよう。

さらにパリで開催された現代日本画と現代工芸の展覧会 Japanese Art Exhibition at Paris については、『日本美術年鑑 第四年版』で「パリ-日本美術展」（1929年6月1日～7月25日）と記載されたもので、冒頭の「昭和四年美術界概観」でも「日仏芸術社肝煎りの半官的の日本美術展覧会」で、パリとブリュッセル「両市に於て異常なるセンセーションを起した」と若干触れてある⁽³⁸⁾。もっとも、日本画の出品一覧がある反面、開催会場も主催者名も洩れている。英文版の第3巻では、詳細が記されている。これはフランス政府によって実施されたもので、ジュ・ド・ポーム美術館で開催され、日本画195点、工芸品157点が展示された。その結果、期間中の有料入場者37000人があり、絵画90点、工芸品35点が売却された。注目されるのは、美術館によって購入された14作家の14作品が列挙されていることである。

これまで付されていた日本美術論はこの巻以後は掲載されていないが、しかしその代わりに、大英美術館東洋版画部長のローレンス・ビニヨン Laurence Binyon 来日講演について一章が設けられている。ビニヨンは英国水彩画五四点を将来し、黒田記念館（美術研究所）に展示したが（1929年10月12日～10月24日）、ほかに東京帝国大学で Landscape in English Art and Poetry と題して6回講演し、さらに京都と仙台でも講演を行った。英文版年鑑には、東京講演の概要が掲載された。

第4巻、1930-1931年版において特筆されるのは、前年に引き続き第二回となる読売新聞主催「日本名宝展」Exhibition of Renowned Japanese Art Treasures、そしてローマで開催された現代日本画展 Japanese Art Exhibition at Rome である。前者については、評判は前年と比較していまひとつであったが、経済不況で社会が萎縮していることもあり、また呼び物である絵巻物について一級品がもともと限られていることが影響しているとその理由を説明している⁽³⁹⁾。

後者の海外展は大倉喜七郎が私財を投じて開催した画期的な企画であり、近年、草薙奈津子氏が調査を重ねて、その詳しい事業内容や反響等が明らかにされつつある⁽⁴⁰⁾。展覧会図録とは別に、同展に際して渡欧した横山大観は帰国後、私家版「伊太利政府主催 大倉男爵後援 羅馬開催日本美術展覧会に就て」（1930年8月）と題した、会場写真を多数掲載した贅沢な和綴じ本を出版した。展覧会にまつわる諸事情を述べ、さらに現地での報道（邦訳）も盛り込んでいる報告書である。

英文版年鑑の記述で注目されるのは、序文でこの展覧会について取り上げ、言語によらない美術の国際的な発信力・影響力を評価し、日本人作家の「一般的な精神あ

るいは精神性」への理解を求めた上で、さらにこの章でも、紙幅の四分の一以上を割いて、ジャーナリズムの反応を積極的に紹介した点である⁽⁴⁰⁾。大観の冊子にも収録されているが、肯定的な評価が多く、「こうした評言から展覧会が西洋人の間でいかに好意的に受け取られたのか、また国外の美術界でいかに大きなセンセーションを巻き起こしたのが容易に想像できるだろう」と展覧会の成功を確認している⁽⁴²⁾。

最終巻、第5巻、1931-1932年版では、三つの展覧会が特記されている。まず東方絵画協会による日華古今絵画展覧会 Exhibition of Ancient and Modern Art of Japan and China（東京府美術館、1931年4月28日～5月20日）では、元明清の名画が展示された。つぎに、国民美術協会主催、朝鮮総督府後援による朝鮮名画展 Exhibition of Famous Paintings of Korea（東京府美術館、1931年3月22日～4月5日）は高句麗時代から李朝の近代までの絵画を展示した⁽⁴³⁾。最後はベルリンにおける現代日本画展（Ausstellung von Werken lebender japanischer Maler, Proißen美術アカデミー Preussische Akademie der Künste, 1931年1月17日～2月28日）であり、1929年パリ、1930年ローマに続く現代日本美術の展覧会という位置づけがなされた催しであった。同展はベルリンの東アジア美術協会 Gesellschaft für Ostasiatische Kunst, Berlin が主催し、プロイセン美術アカデミー、帝国美術院、そして日独文化協会の協力による事業で、展覧会に際して、図録とは別に、矢代幸雄執筆の本 Japanese Malerei der Gegenwart, Würfel Verlag, Berlin, 1931 も刊行された。

これに対して、『日本美術年鑑』の方では判型が小さくなったことと連動するかのようによ冒頭にあった「美術界概観」が省かれ、その代わりに「昭和六年美術界一年史」が配されたが、いかに簡潔な記載に留まっている。ベルリンの展覧会についてでさえ、「ドイツ日本美術展がベルリンに於て開かる。先のローマ日本美術展と共に日本美術の海外進出として、華々しい国際場裡への登場である」とあるだけである⁽⁴⁴⁾。

まとめ

海外向けに出版された『The Year Book of Japanese Art 英文日本美術年鑑』の概要をみると、明らかに日本美術を対外的な文化宣伝の材料として活用しようとする兆候がみえた時期に、その役割を終えているのがわかる。つまり、満州事変以後の対中国政策で非難の矢面に立ち、ついに1933(昭和8)年に国際連盟を脱退する日本政府が迫られた対外文化政策の転換を直接に反映しているといえる。1934(昭和9)年には国際文化振興会が設立された。

もとより出版物という情報発信だけでは限りがあり、むしろ積極的に国際的な舞台で自国の立場を有利にする

ために文化宣伝を実施しようという方向が定まったところで、『The Year Book of Japanese Art 英文日本美術年鑑』は退場を促されたのである。そして、写真を多用した海外向けグラフ雑誌、そして万博における写真壁画へとその役割が引き継がれることになったということがいえる。その一方で、1936年には矢代幸雄がリーダーとなった美術研究所は、明治大正美術史の編纂事業に対して朝日新聞社から援助を受けつつ、より学術的な性格を帯びた『日本美術年鑑』を刊行し始めるのである。

付記 本稿は平成18-20年度科学研究費萌芽的研究「近代日本美術史と英文美術ジャーナリズム—英語版美術年鑑、英字新聞を中心にして」による研究成果の一部である。

- (1) 岩村と『日本美術年鑑』の関わりについては、山梨絵子『『日本美術年鑑』復刻によせて』、『日本美術年鑑』別冊、国書刊行会、1996年、5-6頁、ならびに、田辺徹『美術批評の先駆者、岩村透』藤原書店、2008年、271-272頁、を参照。岩村はおそらく欧米の美術年鑑を念頭においていただろうが、とくに言及されていない。ひとつの可能性として、1880年からイギリスで刊行された *The Year's Art. A concise epitome of all matters relating to the arts of painting, sculpture, and architecture to Schools of Design* がある。本誌は東京芸術大学附属図書館にも所蔵があり、1902年版の構成は、つぎのように詳細な内容となっている。冒頭にはまず購入者が使用できる同年の「日録」Artists' Calendar and Diary があり、以下が本編となる。編者による前年の美術界の総括 The Past Year、ついで政府からの美術関係助成金額 State Aid to Art、国立美術館博物館、主要美術館蔵の絵画、教育委員会 Board of Education (Art)、議会での議論 Art in Parliament、首都の美術施設等、さらに売買、美術商一覧、美術家名簿（略号による出品歴）等、幅広い内容が盛り込まれている。ただし、明白な差異もまた目立つので、可能性としてのみ指摘しておく。
- (2) (坂井) 犀水「日本美術年鑑成る」『美術新報』、10巻8号、1911年6月、29頁。
- (3) 同前。
- (4) 瀬木慎一『江戸・明治・大正・昭和の美術番付』、里文出版、2000年、78頁。
- (5) 無署名「緒言」、清水不濁編『現代美術家年鑑』、美術倶楽部出版部、1933年、1頁。
- (6) 山浦瑞洲・清水澄編『昭和五年改正 現代画家番付』、美術倶楽部出版部、1930年、2頁。
- (7) 青木茂「古書ひろい読み 14」『三彩』、545号、1993年2月、60頁。
- (8) 『中央美術』編集部「緒言」、『現代美術家総覧』、日本美

術学院、1918年、頁付けなし。

- (9) 芳川越「緒言」、美術年鑑編纂所編『美術年鑑 一九二五年版』、二松堂書店、1925年、2頁。
- (10) 税所篤二「序」、『アトリエ美術年鑑』、アトリエ社、1926年、1頁。
- (11) 石井柏亭「緒言」、『日本美術年鑑』、中央美術社、1925年、1頁。
- (12) 覆面居士「二つの美術年鑑」『美之國』5巻1号、1928年1月、121頁。
- (13) 同前、121-122頁。
- (14) 同前、122-123頁。
- (15) 池井優「日本国際連盟協会—その成立と変質」『法学研究』68巻2号、1995年2月、23-48頁。
- (16) この日付について、『大正十五年度国際連盟協会会務報告』1927年、7頁では、「大正十五年五月三十日発会式を兼ねた相談会が丸の内銀行クラブに於て開催された」となっている。
- (17) 学芸協力委員会『学芸の国際協力』、国際連盟協会パンフレット69輯、1927年、17-18頁。
- (18) 同前、21頁。
- (19) 同前、22頁。
- (20) 「国際連盟と美術上の国際協力」『中央美術』14巻6号、1928年6月、124頁。
- (21) 国際連盟事務局東京支局「国際連盟と美術上の国際協力」『アトリエ』5巻6号、1928年6月、124頁。
- (22) 同前、125頁。なお、『中央美術』の訳では、「銅版画」は「版画」となっている。原文が不明のため、どちらがより正確なのかは、にわかに判断できない。
- (23) 同前。
- (24) 『国際連盟協会会務報告 昭和三年度版』1929年、13頁。
- (25) Saburo Yamada, “Preface,” *The Year Book of Japanese Art, 1927*, National Committee of Japan on Intellectual Cooperation, 1928, pp. v-vi.
- (26) Anon., “Introduction,” *ibid.*, pp. 1-7.
- (27) Anon., “Introduction,” *The Year Book of Japanese Art, 1928*, National Committee on Intellectual Cooperation of the League of Nations Association of Japan, 1929, pp. 1-11.
- (28) Anon., “Introduction,” *The Year Book of Japanese Art, 1929-30*, National Committee on Intellectual Cooperation of the League of Nations Association of Japan, 1930, pp. 1-8.
- (29) Anon., “Introduction,” *The Year Book of Japanese Art, 1930-31*, National Committee on Intellectual Cooperation of the League of Nations Association of Japan, 1931, pp. 1-9.
- (30) Anon., “Introduction,” *The Year Book of Japanese Art, 1931-32*, National Committee on Intellectual Cooperation of the League of Nations Association of Japan, 1932, pp. 1-8.
- (31) 拙稿「明治大正名作美術展覧会をめぐって—近代美術展、近代美術館、近代美術史」、科学研究費報告書『〈美術〉展示空間の成立・変容』（研究代表者・長田謙一）、2001年3月。拙著『観衆の成立』（東京大学出版会、2008年）の第3章として再録。
- (32) Note by the editor, *The Year Book of Japanese Art, 1929*, p. 151.
- (33) 展覧会社告、『東京朝日新聞』、1927年6月1日朝刊7面。
- (34) Anon., “Introduction,” *The Year Book of Japanese Art, 1928*, p. 1.
- (35) エミール・コンドロワイエ「フランス美術大観」『日本美術年鑑 初年版』東京朝日新聞、1926年、10頁。同「フランス美術界」『日本美術年鑑 第二年版』同、1927年、12頁。同「フランスの美術界」『日本美術年鑑 第三年版』同、1928年、19-22頁。
- (36) “List of Selected Books on Japanese Art,” *The Year Book of Japanese Art, 1928*, op. cit., p. 170.
- (37) 「古美術展一覽」『日本美術年鑑 第四年版』東京朝日新聞、1929年、59頁。
- (38) 同前、39-40頁、及び「昭和四年美術界概観」、同前、1頁。最近、この展覧会についての口頭発表がなされたが、その概要については、永田真岐子「昭和四年に開催された巴里日本美術展覧会について」『美術史』、168冊、2010年3月、570-571頁、を参照。
- (39) Anon., “Exhibition of Renowned Japanese Art Treasures,” *The Year Book of Japanese Art, 1930-1931*, p. 65.
- (40) ローマにおける現代日本画展については、近年草薙奈津子が調査を続けている。たとえば、同著「一九三〇年羅馬開催日本美術展出品作品に関して」『近代画説』11号、2002年。なお、大倉文化財団編「昭和五年・ローマ開催日本美術展覧会の回想」、1980年、も参照されたい。
- (41) 『日本美術年鑑』の「昭和五年美術界概観」では、横山大観の帰朝談、あるいは朝日新聞パリ特派員重徳泗水による報告、さらにはローマ二大新聞の反応をいずれも長い引用によって肯定的に紹介している（『日本美術年鑑 第五年版』、4-5頁）。
- (42) Anon., “Japanese Art Exhibition at Rome,” *The Year Book of Japanese Art, 1930-1931*, p. 73. なお、引用文は拙訳。
- (43) 本展については、最近、韓国の研究者権幸佳による研究「1930年代古書画展覧会と京城の美術市場—呉鳳彬の朝鮮美術館を中心に」が注目される論点を提供している（『日韓近代美術史シンポジウム 都市と視覚空間』、明治美術学会、2009年、33-46頁）。
- (44) 「昭和六年一年史」『日本美術年鑑 第六年版』、東京朝日新聞社、1931年、2頁。

(おむか としはる)